

琉球大学学術リポジトリ

羅布桑却丹著『蒙古風俗録』（二）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2010-10-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻, 雄二, Tsuji, Yuji メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/18267

羅布桑却丹著 『蒙古風俗録』

(二)

辻 雄 二 訳

Mongrol - un jang arali uileburi
by Lubsangcoyidan

第二章 衣服居室

この民族は古代から円頂形の家屋に住んでいた。一番初めには樹木を囲み、木の枝と草で編んだ空間を作り、ただ一つの入口を残して出入りに使った。このようにして多くの人が住んでいたが、後に知識の進歩に従い、原野の洞窟や高い丘陵地に穴を掘ったりして、移住しながら様々な洞窟に住んでいた。ある人は生まれつきの聡明さから、自分で大きさを決めてうまく部屋を造ることができた。この人は「希里瓦」と言われた。どこから来たかのか分からず、西藏人であるとか本族人であるなど様々に言われていた。希里瓦は自分の身体を基準にして、寸尺を決めた。

頭の形が丸で、肩は方形、二つの目の繋ぎは線とする。手の中指の長さが寸で、肘から指先までの長さは尺。そして手足を延ばす時の形を方円とした。頭と肩の形を基本型とし、顔の真ん中を通る鼻の線を四角形の中心線とする。部屋を作るときも身体との比例で建てた。あらゆる人々が使用するために、寸尺や定規などを残した。人々は希里瓦の方法に習って部屋を造り、そこから蒙古の円頂家屋が出現した。

漢族の周の時代、現在の青海省西寧地方に、この民族が居住して牛や馬などの牧畜をし、隆盛な時期があった。たくさんの人が円頂家屋の造り方を習い、非常に好んで住んでいた。ほかの民族はこの円頂家屋の便

利さを見て羨ましく思い、造る人をわざわざ招いた。人々はたいへん彼らを尊重して、真意を持ってつき合い、彼らを「達爾罕」と呼んだ。達爾罕の意味は長者あるいは職人で、昔達爾罕と呼ぶのは一番の尊敬語であった。

家屋を造れる人間は少なく、達爾罕は非常に珍しいことから、長官と同じような尊称を与えるわけである。また家屋で使う家具などを作る人も同様に達爾罕と呼ぶ。そして達爾罕を招いて家屋を造ってもらうが、完成した時には金銭は払わず、御礼として馬や牛、羊を贈る。感謝の気持ちが一番重要で、物の価値は論じない。このような習俗は今日の蒙古でも残っている所はある。家を造る人は身体の骨の構造を真似し、木の枝を繋げて家を建て、人々は住んでいたのである。

鳥胡兒察国の国王阿爾吉罕の時、漢族の東漢と西漢が交代した時であるが、たくさん職人が蒙古にやってきた。そこで大工や鉄器・銀器の職人は綺麗な器具を作り、王室の造りも工夫を凝らすようになった。とても美しい材料を選んで正室に使い、四つの柱と十二の柵板で壁を造り、天井には八つの開口があり、覆いが施される。木材はすべて柳の木を使い、太さは一寸で、長さは七尺である。一面の柵は広さ二丈五があり、高さが一丈三がある。家の完成した形は円形で、扉があって窓はない。天井には八つの開口があって窓となるが、煙突が中央にあり、すべて絹

などの物で被い、外から皮の絨毯で覆い被せる。麻の糸を縄のように使
い、釘や鉤に銅・鉄・金・銀など最高の材料を使う。すべて最善にする
ならば、このような蒙古式家屋の費用は十数万両の銀がかかる。

人々は国王のため特別に十数万両の銀をかけて宮殿を造る。それは丹
念に良い材料を選び、真っ直ぐで傷のない木を使い丁寧に造るため、簡
単にはできない。人々は喜んで時間をかけるが、いわば義務でこのよう
な宮殿を造るわけである。国王はこのような宮殿を八つ使用し、このほ
かに王侯も三つ使う。いずれも定められた例があるから、それを超えて
はならない。このような宮殿には三つの等級がある。一等の広さは柵面
が十二で、二等は八で、三等は六である。人々が普通に住む家について
はこのような大小の規定はない。一番悪い家は、材料には柳の枝を使う
が、垣根を作るようなもので、同じ円形のものを作るが、あまり広くは
なく、柳の枝を編んでから牛の糞を内と外から両面に張り付けて、太陽
にあて、風で乾燥させてから入居する。国王の大きな宮殿を真似して窓
を作らず、扉しかなく、天井に煙突がある。このような家が大多数であ
るが、一般には下等の住民が一番多いからである。

よその人は事情がよく分らないが、蒙古では家を見たら上・中・下
の等級がすぐ分かる。上等な家は王侯と旗主の住む家であり、遠くから
見れば円形の塔のようで、また白い円球のように見える。通常このよう
な宮殿では、牧畜の季節には兵営も一緒に移動するが、移住するのも簡
単で、宮殿の柵面や覆い物、家具が全て揃えられているなら、移動する
ときに解体し、またすぐに建てられる。非常に便利である。

蒙古の家のなかではしきたりがある。出入りや座る場所などは決めら
れた所があり、やたらに出入りしたり座ったりすることが禁止される。
この規則は最も厳しい。

部屋の右側が上位であり、左側は中位であり、そこが客の座る場所

ある。寝台は正位にある。部屋の中央には竈があり、その周囲に座席が
ある。主人が外出するとき、妻や女たちは左の座席に座ってはいけない
が、長男たちはそこに座っても構わない。外から部屋に入る時、左から
簾の入口より入り、挨拶して礼を済ませてから左の座席に座る。家人も
客も左の入口から中に入るのは規則で、右からの出入りは許されない。
この規則は民族全て同じである。

この民族は元の時代にや々と瓦で廟を作るようになり、大多数の所で
は瓦で家屋を作る習慣はなかった。廟も形は西藏のものを模倣した。明
の時代になって、蒙古は万里の長城あたりまで後退し、漢族のやり方を
習って瓦で家屋を建てて居住するようになった。蒙古の内地に何カ所か
の城があるが、蒙古人は常に移動する牧畜生活に向かないために、瓦の
家屋を好まない。それ故に人々は大きな瓦の家屋を作る習俗がないので
ある。

清の康熙年間から佛教が隆盛になり、蒙古の各旗で喇嘛廟をたくさん
建てるようになった。これをきっかけにして甕を造って瓦を焼くことが
流行してきた。蒙古ではその時から瓦の家屋を造り始めた。満洲皇室の
公主及び王侯の娘閣閤が蒙古人の王侯の妃になることによって、満洲の
姫が嫁いだ旗は全て瓦を使って家屋や官庁などを作った。昔、蒙古で公
の事務は全て円頂形の蒙古式家屋の中で処理されたが、清朝以来、漢族
と満洲の様式を習い家などを全て建て替えて、瓦の家屋を造って居住す
るようにした。後に蒙古では耕地を開墾する風が広がり、人々は家を建
てて漢族のしきたりに変化を加えたため、現在様々な家がある。

蒙古の開墾していない旗では、やはり古い習慣を守り続けて、牧畜の
季節に従って移住し、家屋も円頂形の蒙古式で、現在まで続いた。庫倫
克爾克地方にはたくさんの古代円頂形式の家屋が残されている。

古代には、この民族の人は牧畜を生業としたため、随時移住する習慣

があり、長官も武術の高い人を好む。また財産を守り、家畜を失わないために、人々は馬術と弓矢の練習を重んじた。それ故に居住する家屋はひたすら天蓋を使用し、昔から瓦の家屋を作らないのもこの原因による。蒙古式の家は引越する時に非常に便利であるから、このような円頂形の家屋は今でも人々に大事にされている。

古代には、この民族は樹木の皮を衣服にした。後に麻で生地を編んで、それを体に纏った。印度では上級階層の人は、襟の大きなゆったりとした服を着るが、このような服を普通の人が着てはならない。釈迦が世に現れ、人々の知恵を開いて、衣服を着用するように決めたのがきっかけで、体に合わせて襟や袖を作ることもできた。人間は生まれつきの性質でそれぞれの好みがあるし、寒い時には馬や鹿などの獣を捕えて、その皮で服を作る人がいた。それが狩猟の始まりである。人々は互いに真似をして行動も服装も大いに変わった。

女性は昔、腰あたりを布で巻いただけで、上身の服も腰衣もなかった。男性は寒い時には獣の皮を着て、暑いときは蒲草で編んだ服を着ていた。若干の時代を過ぎて、印度の麻葛達地方で布が流行りはじめ、人々の衣服も変わった。獣の毛で生地を作り、カシミヤや鹿の皮で服を作るようになった。周朝の武王の時代に、綿で布を織る方法が発明され、様々な布の服や絹の服が作られ始めた。商人は周朝の作った綿や絹などを西藏、青海、蒙古に運び、馬や牛と交換し貿易が発達してきた。そうして人々はいつも服装を変えることができるようになった。また商人は西域で羅紗やカシミヤ、毛布の製造法を発明して、それを作って周国で販売した。そのために行商販売のためのものが作られ、それは全国の交通の始まりであった。印度の布、西藏の毛布と支那周国の絹が蒙古専用に売り出され、上級階層の者は異国の生地で作られた服を着るようになり、中級以下の者はやはり獣の皮を使った服を着ていた。上級階層以外の人は絹な

どを使ってはならなかったのである。蒙古では古代からしきたりがあり、服は官用と民用、文人用と武人用に分けられた。家の中に武人がいれば、妻と子供の服も全て武人用になり、甲冑を使って、平日でも武人の着装であった。文官の家では大きな襟の長袖の前釦式の服を着ていた。但し四季の服装というのはなく、春と冬の服装しかなかった。

中国東周の時代、蒙古烏胡爾察国の国王阿爾吉罕の時、蒙古はとても裕福で、王侯夫人の着た服は一着で万両銀余りに相当した。なぜそれほどまでに高価になるかといえば、服の生地は蘇州の絹、金の糸が入った絹、真珠と玉の釦を使い、襟と袖に雲の模様を刺繍で入れる。冬の厚物だと、貂の毛皮、天馬、銀鼠、灰色の鼠などの細い毛を使うため、一着でどうしても一万両銀以上かかる。そのため、蒙古の上級階層の夫人の服は非常に高い。現在の外蒙古大庫倫の王侯夫人の中にはまだこのような服を着る者もあるが、ほかの旗の蒙古王侯には必ずあるとは言えない。このような服にも一等、二等、三等の分別があり、価格はそれぞれ一万両、五千両、二、三千両である。

古代の服装の様式を言えば、武人の家では男女の区別がなく、全て甲冑のようである。襟が大きく、袖が長い。両肩に翹あしらい、袖口には馬の蹄のような模様を入れる。腰には帯を締める。そのすべてに明るい色を使う。現在、蒙古克爾克地方では今も同じような服を着ている。官吏以外の人は軍服を着てはいけない。中国の唐明の皇帝の時、西藏の薩隆贊堪布罕の時代には、蒙古の厄魯特国と烏胡爾察国は唐と西藏の貿易の中継所であった。故にそこでは様々な絹・布・絹などの生地、針・鉄などの道具と帯などの外来品を使った。蒙古は元來格物の学問がなく、牛や羊などの他に産物がなかった。元朝、浩伯來罕の時、蒙古人は漢族の絹などを生地に使って服に作ることを好み、一時の流行で人々はみなそれを使うようになった。後になって蒙古人はそれに不満を抱いた。絹

などは丈夫ではないから、馬に乗ったりするには不便である。外出着としても使ったが、蒙古人の体には合わない。そのため蒙古では絹の服は到底着することはなかった。

蒙古の元来の風習では、服装は丈夫な物を一番好み、綺麗に作られているかどうかはあまり問題にしない。明の時代にも蒙古人の服は古い様式であった。清の時代になって滿洲人が北京に入り、風習が大きく変わり、食事や服装など、漢族を見習いだんだんと身に付いた。そのため、北京風という特別な習俗が生まれ、見栄を重んじて、人々はそれに飛びついた。北京城の人は滿洲風の着装を真似し、それが非常に流行った。そして蒙古の各旗では滿洲の姫を嫁に迎えてからこの風習に染まり、住居と服装を滿洲式にし、もとの伝統的な風習を忘れた。蒙古のうち六盟の男女の服装の様式は、皆北京の流行を追い、内蒙古人の服装は非常に繁雑であった。民国以来、この状況はもっとひどくなり、各旗は開墾のため人口を移住させ、蒙古の風習は破壊され、混乱した状況であった。またこのような雑居が始まってから、蒙・漢の服を任意に着るようになり、内蒙古の各地方では、風習の蒙・漢の分別が困難になった。今は民国七年で、蒙古の風習を調べてみると、外蒙古の克爾克地方の各旗の官民は今でも昔風の服装をしている。軍服の様式や靴、帽子はすべて旧式であった。

蒙古では昔、下駄のような木で作られた靴を履いていた。革靴の値段は数百兩銀である。このような革靴は真珠、金などを生地にあしらひ、さらに刺繍を入れるから非常に高くつくわけである。蒙古の王侯夫人はこのような鹿皮に真珠をあしらった靴を最も愛用したのである。

〔付録資料〕 『蒙古風俗録』和訳

第三章 使用器具

昔から蒙古人の使ってきた器具は次のような幾つかの種類がある。古い時代には樹木の皮で碗を作っていたが、後には木樅で碗を多く作るようになった。その他にも色々な大きさの碗や皿などの木製食器があり、机や椅子、戸棚、箱なども作られた。次第に石製のナベや碗も増え、鉄製の鍋も出来てきたが、それらの器具のほとんどを印度鍋、西藏鍋と呼び、種類も増えた。さらに銅製の鍋も出現したが、それらの器具は西藏の蘇隆贊堪布国王の時代からで、その時に銅製の鍋や鋤、鋏、鏡などが流行し、中でも黄銅製のものが多かった。したがって、その時代の家庭用器具はほとんどが木、鉄、銅で作ったものであった。中でも銅製の壺、鉄製の鍋、木製の碗を持つ家庭を富裕な家とみなした。蒙古人は昔から木製の碗を重んじてきたので、今も木碗を使っている。そして何人家族であろうとも各人一つずつの碗と箸を持ち、食事をする時には自分の碗を持ってきて、食べ終わるとそれを自分で保管する。このような習慣があるので蒙古地方を旅する人は自分で碗を持参しないと、食事の時一緒に食べることができず、他の誰かが食べ終わってから碗を借りて使うことになる。特に宴会などの場合は必ず自分の碗と箸を持っていく。

このような理由で蒙古人は誰もが自分の碗と箸を持っているのである。碗や箸を持たない人は、食べることを知らず、命を大切にしない、身体に気をつけない人間として嘲笑される。ゆえに蒙古人は子供が生まれて、一年目の誕生日の記念に子供用の碗と箸を選び与える。このような風俗があるため、農耕をしない蒙古地方の家庭では、今でも一人一人が碗と箸と蒙古刀をもっているのである。蒙古人の持つ立派な碗には金や銀を

散りばめたものもあり、その価値は百両銀子のものである。そして裕福な人達は皆、できるだけ自分の腕や箸、刀を良い鉄や金で立派に作り大事にする。箸を象牙で作ったり、輪を金で作った蒙古刀は二、三百両の銀子にもなる。

昔から使い慣れた碗であるが、後に蒙古人が軍事を重んじた頃から、鉄や銅の器具がたくさん作られ始めた。成吉思汗の時代から、蒙古軍は世界中へ進出する度に、いろいろな器具を蒙古地方へ持ちかえるようになったが、その中から丈夫なものを選んで使った。なぜならば蒙古人の住居は狭く、余り多くのものを置く場所がない。そして遊牧による移動を行う時に割れ物や壊れやすい物は、大変問題となるので磁器製の碗や大皿は多くない。後に定住式の家を建て始め、磁器製の碗や大皿が流行り、挽き臼や瓶、巻き上げ機、篩などいろいろな器具が使われるようになった。これ以前の蒙古地方には器具は少なかつたが、軍隊用のものはかなりあった。農具はほとんど漢人が持ってきた物であるが、金槌や手臼などは昔からあったものである。今でも農耕を行わない地方では磁器は珍しいものである。

一方、軍人が使う鞍で金や銀を散りばめたものは、何千両という価値のあるものもあり、蒙古人が使用してきた器具は軍事的な伝統の中で使用されてきた物が多い。器具の中で一番高い物はやはり鞍で、次は甲冑、蒙古刀、そして碗と続く。昔の甲冑類は少なく、今それを持っている役人などは、先祖の遺言により遺物として保存している。しかし実際には漢式の用具も多い。

現在の蒙古人の生活様式には二通りがある。牧畜を営んでいる所は皆昔ながらの器具を使い、磁器は少なく、依然として木製の器具が多い。そして農業を営んでいる所では漢人と基本的に似た風俗であり、磁器が増えている。家庭用の器具も木製が少なくなり、昔ながらの銅製の器具

も減ってきている。蒙古人は茶を重視するので、どこの家庭でも紫色と黄色の銅製茶壺がある。元来蒙古人の家庭には銅製の器具が多かつた。鴨の嘴を象った茶壺、酒壺、鍋、洗面器、鉢、鋤などいろいろな銅製の器具を使用していた。今は新しい器具が流行したために、昔から伝わる貴重な器具は少なくなつた。現在の蒙古地方の器具は古い物と新しい物が混在しているのである。

第四章 飲食茶酒

昔から蒙古人は、裸麦アルパイを白で挽き粉にして食べていた。また、オウル・アムをノヤンシンとも呼ぶが、これは高粱のことである。乳茶は乳スインチと梨の木の葉を煎じた茶を混ぜて作るもので、古くから好んで飲まれた。そのほかにはホノグ・アムをモンゴル・アム「蒙古米」と呼び、またザガクと呼ばれる蕎麦粉も食べた。ただ常食としていつも食べるものは、モンゴル・アムである。その作り方は穀殻のついたままのモンゴル・アムを一度湯で軽く煮る。その後、細かい砂を鍋に入れて熱し、砂が真っ赤になつたところへ煮たモンゴル・アムを入れる。ピチパチという弾ける音が出るまで炒める。炒められたモンゴル・アムを白で挽いたものをホルスン・アム「炒米」と言うが、それを日常の食物とし、大切に食べていた。今でも蒙古地方ではホルスン・アムやホーレ・バタをよく食べる。このホーライ・アム「乾燥した蒙古米」があるため、蒙古人は茶を重んじ、毎朝茶を煮て、乳茶を作る。そして碗に半分くらいのホーライ・アムに乳茶を注ぎ飲む。大人も子供もそれぞれ自分の食べる分だけホーライ・アムを入れ、乳茶を飲み、これを食事代わりにすることもあつた。毎年七月になると蒙古地方にある梨の葉や榛の葉を採集し、どちらも茶

にされる。このほかに粟を挽いて粉にし食べるが、蒙古人の伝統的な食物は、茶をはじめとして、裸麦やサクゴリル〔蕎麦の粉〕、そしてホーライ・アムなどである。後になって麦粉や米が入ってくるが、いずれも蒙古地方で産出するものではなく、したがって蒙古人も重要視しなかった。このような習慣があるために、今でもモンゴル・アムを重要視するのは本当の蒙古地方だけである。

清の時代になってから、漢人を蒙古地方へ移住させ、各種の米や豆などが作られるようになった。農耕を中心とした社会であれば、どこでも五穀の種は充分にある。しかし農耕をしない蒙古地方では依然として昔ながらの習慣に従って、乳茶とモンゴル・アム、蕎麦粉を主に食べる。食材では牛と羊の肉を重んじ、他に野菜などは一切なかった。農耕社会であれば、食材も豊富で、野菜も多い。果物では梨や桃などがある。蒙古人自身が農耕を始めたのは、清朝の康熙年間のことである。それ以前は農耕を知らなかった。蒙古人は牧畜についてはよく知っているが、農耕については知らない。このようなわけで蒙古料理には野菜料理は少ない。野菜の類では葱や韭、牧馬豆など、幾つかの野菜は蒙古地方にも古くからあった。それに対し白菜や大根茄子などは極めて遅い時期に入ってきたものである。昔ながらの蒙古料理には茶と粥がある。最高の茶は乳と紅茶を一緒に煮て作ったものである。その次は茶請のウルム〔乳を沸かすのできる膜状のもの〕、乾酪^{チヂク}、乳酪^{ホクト}、裸麦、炒米^{シヒル}、砂糖などが揃うと最高の蒙古料理となる。そのほかには肉料理として牛、羊の丸煮がある。その丸煮の茹で汁にモンゴル・アムや米を入れて粥にする。先ず丸煮を食べ、その後で粥を食べる。このような食事には漬け物はいらぬ。蒙古料理では丸煮と粥を最高の料理と見なす。これ以外の麺類や飯類を最高の料理とは言わない。どんな重要な宴会でも蒙古人であれば、丸煮を出して宴会を催す。三種の丸煮とは牛、羊、豚のオーツと呼ばれ

る臀部を煮て作ったものを指す。

蒙古地方で今行われる宴会には二通りある。蒙古式宴会では幾つ丸煮を出したかが重要で、もう一つの漢式宴会では幾つの大皿と小皿が出たかが問われ、皿の数を数えるのである。蒙古酒は三種類ある。昔は山梨を発酵させてナイルン・アルヒと呼ぶ酒を造ったが、後に牛、羊、馬の乳でダラスと呼ばれる酒を造るようになった。乳から造る酒をダラスあるいはサラホドと言うが、これは乳からアラジと呼ばれるものを造り、酒と混ぜてダラスを造る。もう一つはモンゴル・アムと高粱と粟を発酵させ、鍋で醸造する酒である。この酒は穀類から造られたのでポダーン・アルヒ、即ち米酒または蒙古酒と呼ぶ。これ以外の酒は全て外部から入ってきた物で、蒙古地方では今もこの三種類の酒を造っている。

蒙古茶というとその土地で産出されるストンチエがある。紅茶、花茶、磚茶は南方から入って来たものである。葉煙草も外から入って来たものである。これも農耕を始めた後に植えるようになったものである。

稲が南方から入って来た現在、ホルスン・アムや裸麦、蕎麦粉に加え、高粱や粟、豆類、農耕地帯では野菜も普及している。本来の蒙古食材は少なくなり、今は食材も料理も種類が増え、いろいろな食べ物があり、蒙古の食べ物が変わりつつある。

第五章 分別種族

蒙古人はその血統を非常に重んずる。昔から罕^{ハン}の血筋をひく人達をタイジといい、彼等を特に尊敬する。ウリヤンハン部族の族長の血筋の人をタブナンと呼び、貴族として尊敬された。また武将の血筋の人は筋丁^{フコホヤシ}と呼び、名門と見なされた。老百姓はハラチュと呼び、中でも極めて貧

しい家の子女は、裕福な家の使用人となり、孤児や寡男、寡婦、そして未婚女性の産んだ子供などは召使いで、下層の奴隷的な身分となったためにフプトと呼ばれ、ゲルン・フムン即ち家人とも言った。このような身分の人には旗の衙門〔役所〕の戸籍簿に名を記す資格がない。昔から蒙古の部族は、三年毎に家族の人員を盟の印鑑のある戸籍簿に登録する慣わしがあった。そして兵役を服する人を選ぶために、男子は十八歳になるとそこに行つて登録する。このような規定があるために、どうしても三年毎に一度、男子の名簿登録を行なう集會を開く。その集會で登録される十八歳の男子は三世代以上の先祖の名を報告し、自身の名を書き保存する。この時三世代以上の先祖の名を覚えられなかった人は、ピチエーチと呼ばれる知識人に頼んで名を請求し、ハディク〔白絹〕と贈物を奉げて、名を登録してもらう。この集會にはどのような血統の人であろうとも必ず来て、名簿に名を登録する。

しかし、もとより二つの慣習がある。タイジとタブナンを出自にもつ人は、赤い線の上に名を書き、また一部の兵士出身の人と功勞があった諾巖〔役人〕の子孫も赤い線の上に名を書き、普通の兵士や平民出身の人は普通の線の上に書き、決して赤い線の上に名を書いてはならない。名簿の赤い線は重要で、普通の人はどんなに優れた人でも軍事的功績がなければ、赤い線の上に名を書くことはできない。これには厳しい規定があるが、いずれにせよ名簿には赤い線と普通の線の二種類があり、蒙古人は互いにこの区別を非常に重んじる。

また平時であっても、名簿に名のある男と名の無い男は特に区別している。蒙古の慣習では家庭の中で長男だけが名を名簿に登録し、長男以外に何人の兄弟がいても彼らの名が名簿に順に並べて書かれることはないし、もとより女子の名は名簿には書かない。ただ戸籍の人口の數に書かれるだけで、故に蒙古では今日まで血統を大切にしてきた。

蒙古人は古い血統を区別するときには骨で区別しヤストと呼ぶ。後にオプグタンと呼ぶようになったため、ヤストという呼称は使われなくなった。罕〔君主〕の血統の後裔はタイジになった。今調査したところによると、蒙古人の血統にはタイジ、タブナン、フホホヤグ、ハラチュ、アラト〔人民〕、フプト〔召使い〕などの出自の人がいる。フプトは召使いであるため、役所の戸籍には名の登録はされていない。しかしフプト出自の人で五世代を超え、顔立ちの整った子供が生まれた時には、雇い主が役所に行き、五代の間召使いとしてきちんと勤めたことを告げ、戸籍に名を登録してくれるよう申請する。その際には雇い主の保証が必要で、アラトの欄に名を記される。またアラト出自の人で軍事的功績をあげた人がでた場合はフホホヤグの欄に登録することができる。フホホヤグとハラチュ出自の人が同じく軍事的功績をあげた場合は、タイジの身分へあがることのできる。そして公の名爵が与えられ、名簿の赤い線の欄に名を登録する。蒙古人の身分はこのように昇格するものである。

逆にタイジ出自の人が盗みをしたり、犯罪を犯したり、嘘をつけば名を赤い線の欄から除名され、フホホヤグに降格され平民の名簿に移される。蒙古人は血統を重んじ、なおかつこのように降格させることもあり、昔からの伝統として今もこれを遵守する。

漢人でありながら蒙古人になることも多い。漢人が蒙古人になる理由としては三つの場合がある。かつて漢人は商売が得意で、旗や地方のノヤンの商人となり、時が経つにつれ蒙古の習慣にもなれ、知り合いのノヤンの属民となり、そのノヤンの血統のもとで蒙古の戸籍を取得した。また、閩閩〔清朝の皇族出身の女性〕や公主〔皇帝の娘〕をノヤンに嫁がせる時に、一部の漢人が同伴してきて蒙古人になった。他には蒙古の裕福な人が漢人の青年男女を買って召使いとし、だんだんと蒙古人になった場合もある。このような三つの理由から漢人が蒙古人となったが、彼

らは蒙古姓はもたず、皆漢姓を使っている。それは本来の蒙古姓は他の言語での音訳はできるが、意味を翻訳することはできないからで、張・王・李・趙といった漢姓を使っている蒙古人もあるが、彼等はずもとの先祖が漢人である。清朝が建国された後に、漢人と蒙古人は雜居するようになり、漢人でありながら蒙古人になる人の数はさらに増えた。

現在の内外の蒙古において各部族の血統は主にタイジ、タブナン、ハラチュという三つの血統をはっきりと区別しているが、その中の元漢人である蒙古人とアラト、フプト出自の区別はよく分からない。しかし正式に血統出自を調べる場合は必ず出身部族の血統を調べ、真実を書きようにしている。もし出自の血統が低い場合は、宴会や集会などの場所でも慎重に座席に着く。また娘を嫁にだす、或いは貰うなどの婚姻関係や友人を選ぶに際しても、血統を非常に大事にする。故に今も蒙古の各部族は互いに血統を厳しく区別している。このように蒙古の習慣では蒙古人の血統を六つの階級に分け、名簿に登録する法的な資格をもたないハラチュ出自の人たちの召使いを奴隸といい、またシブグチンとも呼ぶ。旗の名簿に名が登録されていない人及び下層出身の人はフプトと呼ばれる。

第六章 王侯爵位

蒙古ではノヤンや一部貴族などの宗族が繁栄し、人口も増え、長い間ノヤンの血統を法的に重視していた。しかしチンギス・ハンの時代になり、チンギス・ハン自らが戦闘を指揮し、広大な領土とたくさんのお金を築き、元朝を建国し、宋を滅亡させ、世界を征服した。それよりチンギス・ハンは戦闘における人々の功勞を調べ、自らの宗族に属する人々をノヤンの爵位にし、また親族や友人の子孫にもそれぞれ爵位や領土を分け

与えた。これより後、子孫が増えても先祖の規定した慣習に違ひ、長男がそれを相続した。このような慣習を皆忠実に違ひ、それぞれの財産や領土をきちんと守ってきた。爵位がなくても同じ一族であるため、その中からバヤン〔富人〕、ノヤン、バートル〔英雄〕が生まれれば、また一族の名を高めることができるので、皆貴族として尊敬される。後にはチンギス・ハンの弟、ハプト・ハサルの子孫が繁栄し、外藩〔外モンゴル〕の五十七の旗と内藩〔内モンゴル〕の四十九の旗の王となった。その中でも、ウリヤンハン部族のタブナンの子孫は喀喇沁三旗とモンゴル旗の王となっている。

ここまで述べてきたタイジ、タブナン、そしてさまざまな貴族たちは皆チンギス・ハンからフビライ・ハンまで、分封された爵位と領土をそのまま保ち続けた。後に元が滅ぼされて明朝に征服されたが、蒙古人は長城の北へと退き、アルハンガイ地方を占領し、未だ一つの蒙古国として存在していたが、その王順帝リッヂン・ハン丹汗は政治をうまく処理できず、蒙古各地で部族間の戦いが起こった。ちょうどその時期に満人は東の黒龍江、吉林、ムグタン〔現、遼寧省沈陽市〕、長白などの地方を占領し、国を建て、明朝の軍隊と戦うたびに勝利をおさめていた。隣接する土地に住む蒙古人はその事情を知り、またリッデン・ハンの無理な支配から逃れ、清の天命九年にチンギス・ハンの弟ハプト・ハサルの十七代目ホン・タイジ、オンゴタイの長男オーバは属民を率いて満人に投降した。その後、天聰七年にオーバの息子バデリを済農の爵位に封じ、トウシエトと呼称され、職務を引き継いだ。このような事情を蒙古各地の部族の人々は伝聞したために、清の天命から天聰にかけての時代には、先祖の血統や爵位などを証明できる史料を携え、次々と属民を率いて満人に投降した。清朝の大臣は従属を求めやってくる蒙古のノヤンを尊敬し、それぞれの血統を調べ、相応の爵位を与えた。これによりますます蒙古の各部族

は従属を求め、清の皇帝の名声は高まり、明の都を占拠し北京と改名し、ついに清朝を建国した。その際、蒙古人は明の軍隊と何度も戦い、城や関門を打ち破り、清朝建国のために力を尽くして貢献した。そして順治皇帝は即位した後、蒙古人の功勞を調べ、血統によってタイジ、タブナンに爵位を封じて名簿に登録し、親王、郡王、貝勒、貝子、公などの爵位を与えた。また順治皇帝と康熙皇帝の時から、清の公主を蒙古のノヤンの嫁にするようになったため、多くの蒙古の旗王は公主を娶った。そして清朝皇帝も蒙古の慣習にしたがい、長男が爵位を相続するような法律を定めた。蒙古のノヤンもこれに従い、それぞれの父親の爵位を相続し、法律を守っている。盟、旗、郷に生まれ育てられた男子は十八歳になると旗の名簿に名を登録する。もしタイジの家系に相続すべき男子がいなければ、親族の中から近親のタイジの息子を養子として受け入れる。旗の王家に男子がいなければ、近親のタイジの息子を扶養し、その位を相続させる。タイジ、タブナンの親族も旗の名簿に名を登録する。旗の王や貝勒、貝子、公の場合は清朝の理藩院に報告し、皇帝の許可を受けて爵位を相続する。もし王や公が爵位にあっても、犯罪を犯した場合はその爵位を剝奪し、近親の者あるいは従兄弟に相続させる慣習が蒙古では守られている。

清朝がおこなった蒙古人の爵位相続についてのやり方は、中華民国も変更せず、蒙古の王、公、タイジ、タブナンの爵位をそのまま残している。なぜならば蒙古人は昔からノヤンやアラバト〔僕人〕ともに、それぞれの領土を占拠してきた慣習があるため、漢人のように役人を度々交替することが無理であった。蒙古の部族は数多くあるが、昔からそれぞれの領土・属民を分封されており、大小多少に関わらず皆ノヤンがいるため、ただ自分たちのノヤンを尊敬し、ほかの部族のノヤンとは関係がない。今では旗ごとにそれぞれの王がいる。そして旗のことをその旗出

身の宰相が処理する権力を持つが、別の旗の人を抑える力はない。もし、旗の王が子孫の無いまま死んだ場合は、旗の政務を管理していた大臣によって議論され、旗王の親族の中から一人が選ばれ、旗王の位に即す。このため蒙古の各旗では、それぞれの旗王の爵位を昇格させることに力を入れる。蒙古の王侯が爵位を相続する制度は、以上のようになっている。

清朝光緒年間には、理藩院も法的制度に違反したことを多くおこなった。規定通りに爵位を相続するためには、公の場合は千両の銀を供出し、併せて爵位相続の申請状を提出する。しかし、さらに賄賂として千両の銀を出さなかった場合は、申請状を何年も置いたままにし審査をしない。従って王の爵位を相続するには二千両の銀が必要となる。蒙古のノヤン達は爵位を相続するために多くの銀を理藩院に渡し許可を得る。こうして各旗のノヤン達が著しく悪くなったのは宣統年間のことである。つまり、宣統皇帝の時から賄賂が横行し、金無くしては爵位を相続できないようになった。そのため各旗が貧しくなったのは、蒙古のノヤンの爵位のためである。実際には功勞があっても、賄賂を贈らなければ理藩院は一切を不問に付した。このため今の蒙古のノヤン達は爵位を得るのに非常に困り、爵位のためにたくさん銀を出すので、ますます貧しくなっている。本当の原因はここにある。

(1) 原文には「蒙古衙門」の意味で記されているが、清朝は一六三六年に設置した「蒙古衙門」を一六三八年には「理藩院」と改称している。ここでは「理藩院」と訳す。

第八章 古來習慣

昔から蒙古人の伝承してきた風俗は、地方によって少し違いがあると
言われるが、実際にはそれほど差はない。大昔には食物も少なかったた
め、獲物の肉を食べる時、まず天を祀り、四方へ奉じた。その後人数
によって分配し食べていた。またどんな食べ物であっても、食べる前に
天を祀ってから食べる。大きな部族の場合は一年の四季にあわせて四回
天を祀る。春と秋の祭祀を大祭祀イ、ケヒヒガといい、夏と冬の祭祀を小祭祀ハガ、ケルヒヒガという。
供物は主に馬、牛、羊の家畜で、それぞれ大きい物を選び、天に祀る。
併せて酒、牛乳、果物を供物とする。天を祭祀する場合は高いところと
平らなところでおこなう。天を祭祀した日には、祭祀の供物であった馬、
牛、羊の肉を、その日集まった人々が共に食し、終わらせる。天の供物
にしたものは決して残してはならない。これは古い習慣である。また地
方のガジャル・オロンノエジデ「守護神」を祀る場所として、それぞれ
の部族が住んでいる村の近くにある石、あるいは樹木を選んで神の宿る
ところとする。周囲の村々の人達も春と秋の季節にこれを祀る。
もう一つの習慣は、村で宴会や集会がおこなわれ、老人達が集まって
酒を呑むときには必ず若い者がお酒を注ぐ。その時老人達は次のように
祝詞を誦える。

「父母オヤには孝を行い 主やノヤンには功勞を差し出せ 国には英雄
の名声をあげて」

また、家に年取った爺婆が客として来て酒を呑む時にも、若い者は酒
を注いで勧め、その場に叩頭く。その時老人達は次のように祝詞を誦え
る。

「父母には力を尽くせ 主たるノヤンには功勞をたてろ」

若い嫁が婆に酒を勧め叩頭くと、婆は次のように誦える。

「父母を喜ばせ 福のある子を産んで幸せになれ」

未婚の若い嫁が老人に酒を勧め叩頭けば、「良い婿に会って名だたる
金持ちとなれ」と祝う。このような習慣が蒙古の部族には伝承され、宴
会などで若い人が酒を勧めると老人達は必ず祝詞を誦えるのである。ほ
かにも互いの家を訪れた場合には吉祥な詞を言う習慣がある。食事をし
ている時に客が来たならば「この家の飯が増えるように、お茶がおいし
くなるように」と言う。それに対して家の主人は「貴方の言うとおりに
なるように」と応える。また搾乳をしている時に来た客は「乳がおいし
くなるように」と言う。年老いた客が宿泊した時には「生活が良くなり
ますように、家畜がよく繁殖するように」と言い、家の主人は「貴方の
言うとおりになりますように、また楽しい再会を」と挨拶をし見送る。

そして蒙古では甲と庚の日を忌む習慣がある。なかでも甲子と庚午、
庚申の日を特に忌む。これらの日には貸借関係や財産関係については行
わない。朝の茶を飲む前に家の外にもは出さず、また夜になって外が
暗くなると、同じようにものを外に出さない。それ以外にも、嫁は舅の
名を口にするのを忌む。たとえばバヤルという名前の場合には、「バ」
という文字（或いは発音）を忌むのである。また女性が火の上を跳んで
跨いだり、刃のあるものや鋏、刀などを外へ出したり余所の人に向けて
はならないとされる。さらに女性は縄と碗の上を跨いでもいけない。

ほかにも女性が出産した時には、門の上に弓や矢を掛けて男の子を産
んだことを示す。女の子が生まれた場合には、門の上に赤い絹を掛けて
示す。また、全ての家庭には門の南側に、薪の灰を積み上げたオボがあ
る。これはその場所に毎朝炉の灰を捨てるので、積まれた灰の山ができ
るのである。しかし、もし人が亡くなると家から遠いところに灰を捨て、
三年を越えると年忌の供養もしなくなる。また、婚姻に際してはその両
家の距離が遠いほど良いとされる。蒙古人には「井戸は家から近い方が

良い 婚家は互いに遠い方が良い」という諺もある。昔からこのように考えられてきた。また、多くの財産と大きな家を必要としない。冬と夏に草地を移動するので、生活は天幕を主とする。狩猟をたいへん好むのは、蒙古の昔から伝承されてきた習慣である。多くが集合して一緒に住むことはせず、一家或いは二、三の家で共に生活することを好む。その理由は家畜の群を飼育するのに不都合があり、また家ごとに犬を飼うので、互いに諍いを防ぐためである。このため牧畜を営むには多くの家が集合しては住めないのである。

佛教が伝来し、蒙古地方でラマ僧が増えたため、年配の女性で尼になった人も多い。裕福な家では年配の女性は必ず戒律を受けて尼になり、家庭のことを全く考えず、毎日念仏を唱え過こしていた。今では蒙古部族のほとんどの家に年老いた尼がいる。また佛教を信仰する家の老人はラマの服を着て、自宅にいても信仰心は強い。

蒙古の習慣では、客が来た時も自分がいつも座る席を譲ることは無く、客も主人の席に座ろうとすることはしない。食事をする時にも先に家の主人に用意し、次に客にという順番である。主人が杯を挙げ乾杯を促すと、客も酒杯を取り、軽く下げて礼をし酒を呑む。どんな食物であっても、蒙古の習慣では主人が先で、次が客である。昔から続く本當の蒙古の風俗はこのようである。

第九章 王侯結婚

蒙古のノヤン達の婚姻習俗では、同じ部族内では結婚しない。同じ部族内で互いに結婚する例もあるが、それは十代以上経て分枝した後には同じ部族であっても結婚できるからである。但し同じ地方、同じ盟の範

囲では同じ部族の人同士結婚してはならない。同じ部族であっても地方が異なり、そして何世代も経ている場合には同じ部族の人でも結婚できないが、同じ盟に住んでいれば、何世代経ても絶対に結婚してはならないという慣習があった。タイジ出自の人はタブナン出自の人と結婚する。タイジ、タブナンがハラチュと結婚する場合にはフホヤグ出自のハラチュと結婚する。ノヤン出自の人達は婚姻に関することを非常に大切にす。相手の血統を調べ、閨閣を嫁にやる。妃を娶る場合には血統や出自などをよく調べ、そして親族と年齢を考え結婚する。同じ盟ではなく、

外の盟にノヤンの閨閣を嫁に出すときは、閨閣の裝飾品、簪、耳飾り、腕輪、金、銀、真珠、珊瑚、玉石、瑪瑙、寶石、銅製洗面器など、また四季折々に着る衣服、そして下女、下僕合わせて二、三十人を従わせる。大富豪やノヤンは閨閣を嫁にやる際には、ほかに生活用品、例えば家庭用の器具、飲食料、及び羊や牛などを数十頭つける。その際嫁入りの道具などを帳簿につけ送る。結婚の儀式の時には集まった客と親族の前に卓を置き、これらのものの名前を一つ一つ呼び上げ、閨閣のものとして婿の家に渡す。この帳簿を読み上げてくれた人には婿の家から二両銀と一着の外套が作れるような生地が贈られる。蒙古のノヤンでも裕福な人は嫁入った先で使うものや天幕など全てを揃えて嫁にいくのである。

ノヤンの元々の婚姻習俗では、嫁を迎える側は閨閣のいる家へ使者を派遣し、父であるノヤンに結婚の意思について尋ねる。一般的な進め方としては、事前に親族の人に言伝を頼んでおく。そして派遣した使者の贈ったハディクをノヤンが受け取り、その返礼としてハディクが贈られれば、婚姻を許可したことになる。ハディクを交換したことによって両家は婚姻関係を結ぶのである。もし使者の持ってきたハディクを受け取らずそのまま返すと、その婚姻は結ばれない。ハディクが証とされ婚姻関係は結ばれるのである。結婚が決まった後、宴会を催すために婿方か

ら肥えた牛を雌雄一頭ずつ、羊四頭、酒瓶を蒙古式の車に乗せて、嫁方の家へと運ぶ。家の近くで車から降り、持ってきた礼品を渡すと宴会が行われる。もしその年のうちに結婚式が行われなかった場合は、新郎は必ず正月に新婦の家を訪れ、その家の仏像にハディクを奉じて叩頭き、その後父母に叩頭く。また親族の家を廻って、皆に正月の挨拶をする。

このような挨拶が終わると新婦方の親族が正月の宴会を準備する。もし幼少期から結婚が定められていたならば、婿となる男は結婚するまで毎年正月には嫁方の家へ行き新年の挨拶をする。しかし、その両家の距離が何千里も離れていた場合は、幼いという理由で新年の挨拶は行かなくとも良いとされる。蒙古人は婿が新年の挨拶に行くことを重視し、この慣習は定着していた。

蒙古のノヤン達は血統が同じであるため、娘をほかの盟に嫁がせるか、あるいは逆に嫁に迎える場合が多い。同じ地方に裕福な人がいても、出自がハラチュであるため血統を差別し、ノヤンの血統の人達は必ず遠いところの人と婚姻関係を結ぶのである。満人は清朝を建国した後、清の皇帝の公主を蒙古のノヤン達に嫁がせることが多かったために、各旗の蒙古王は清の皇帝の親族と姻戚関係を結んでいた。したがって今のところ蒙古人同士の婚姻関係は少なくなり、ノヤン達のほとんどが北京から妃を迎えることを盛んに行っている。しかし清の皇帝は謀計を用いて、蒙古部族を支配するために清の公主、閏閏を嫁がせた。その理由は二つある。一つは蒙古のノヤン達はチンギス・ハンの後裔なので血統が良い。清の皇帝がその血統と通婚しても釣合がとれる。もう一つはその時蒙古のノヤン達は強壯で、軍事力も持っていた。そのため清の皇帝は公主、閏閏を蒙古のノヤン達に嫁がせることで、蒙古人を征服しようとした酷い謀計であった。そのため清の皇帝の血統を持つ閏閏を蒙古人に嫁がせる時、必ず報告して閏閏の本当の名前の前に皇帝から号を授けて貰い、

「××公主」と名乗る。また頰紅の焙烙も授けられる。こうして公主は名を世間に知らしめるのである。もし皇帝の遠い親戚に当たる場合には、公主の号を授けず、ただ閏閏の号を授ける。そのため蒙古では閏閏と公主の区別がある。皇帝の血統で近い親戚の娘は公主の号を授かる資格をもつが、遠い親戚あるいは王、公、貝勒、貝子の娘は公主の号ではなく、閏閏の号を授かるのである。ゆえに王や公などの娘を閏閏と称するのである。蒙古のノヤン達は清の皇帝の公主を妃に迎える時は、皆満人の風俗に合わせ、蒙古の習俗には合わせない。満人の婚姻習俗では、娘を嫁がせる時にはまず新郎を見る。新郎を見て気に入ると婚約の準備にはいる。まず婿方から仲人をたて嫁方の家に礼品を贈る。そして次に何千両もの銀を贈って、妃を迎えるための宴会をおこなう。あまり複雑な儀礼はない。蒙古のノヤンが清のノヤンの閏閏を妃に迎える時には、まず北京式のやり方でやらないように相談する。なぜなら北京では婚姻の際には必ず嫁入り道具として簞笥、箱、卓などを取り揃えるのである。しかし蒙古の家は広くない上に、距離が遠い。したがって途中困らないように、嫁入り道具は必要ないことを要請する。このような慣例から蒙古のノヤン達が北京から妃を迎える時には、木製の嫁入り道具は少ない。それに比して北京に駐在する蒙古のノヤンは、北京式の結婚式をおこなうのである。このため蒙古のノヤン達は北京から妃を迎えることを好まない。北京から妃を迎えた場合、費用が高くて旗の人々にも苦しみをもたらすことになる。人々に納税させることは大変な苦しみを与えることになるのである。貧しい旗の人々は皆、旗のノヤンが北京から妃を迎えることを嫌う。清が建国した後、蒙古の諸部族は清の閏閏を妃に迎えるようになったが、それによって旗王等は北京での負債が増え、旗の耕地を売ったりした。これも北京から妃を迎えたことに由来するものである。

初めは蒙古のノヤンが清の公主を妃に迎えるには良い時期で、豊かな

時代であった。しかし、後になって良いことが何も無いにもかかわらず、清のノヤンはいよいよ悪くなり、良い閹閹を蒙古のノヤンに嫁がせず、遠い親戚の娘を閹閹と称して嫁がせ、騙すことも多かった。また満人の王侯の兄弟の妻を閹閹と偽って蒙古のノヤンに嫁がせた例も多い。蒙古のノヤンは互いに嫉妬して、自らが求めて北京の満人の娘を妃にした例もまた少なくない。このような事情で、清の王侯や内、外の蒙古の王侯と通婚したのは次の通りである。義親王の閹閹は蒙古の博王の妃に、礼親王の閹閹は蒙古の喀喇沁王の妃にそれぞれなった。また肅親王の閹閹は蒙古の敖漢王、喀喇沁王の妃となった。このように蒙古の各旗の王はほとんど皆、清の閹閹を娶ったのである。不思議なことには満人の閹閹が子供を産むのは稀で、蒙古人は口々に「満人の閹閹たちは子供を産まないように薬を飲んでゐる」と言い合った。蒙古のノヤンは妾が産んだ子供を、本妻が産んだ子供と名乗って報告し、後に父たるノヤンの爵位を相続させた。

以上は蒙古の王侯の婚姻習俗とその歩み、代々蒙古人同士で婚姻を結ぶ習俗と満人との通婚した歴史を調べて書いたものである。

第十章 平民婚姻

蒙古の平民における婚姻習俗では、同じ部族あるいは同姓の人は結婚してはならない。もし同姓の人であっても親族ではない場合、仮に娘の姓を変更して結婚させたとしても、人々は同姓であることを認め、宴席には参加しない。つまり慣習に従って、親族ではないが同姓である場合は結婚しない。通常名譽をたいへん重んじ、結婚相手を探す時には姓を尋ねる。したがって同姓であるにもかかわらず結婚した場合は諷刺嘲られる。

女性の結婚年齢は十七歳から二十一歳までである。男性のそれは十八歳から二十五歳である。もし女性も男性もその年齢を過ぎても結婚していない場合は、結婚の機会を失ったと見なされる。このような習俗があるため、ほとんどが二十歳前後で結婚する。そして今は夫が年上、妻が年下とされるが、昔は結婚相手の年齢が同じであることを重んじた。今のように男性の方が年上であることが良いと思うようになったのは、佛教に由来するものである。経によれば女性の身体が成熟するのは十三歳で、男性は十五歳で成熟する。このような生物の成熟する原理に基づいて、女性は十七歳になると妻になる資格を得、男性は十八歳になると成人すると見なされた。このような経の教えがあるために、蒙古人は結婚の年齢を男性は十八歳、女性は十七歳の時が一番良いと考えた。男性が結婚年齢を過ぎても結婚していない場合には、チャガン・フブグン「白い息子」と言われ、女性の場合はウラン・ウヒン「赤い娘」と言う。生涯結婚しなかった男性はガニ、女性はムチドと呼ばれた。

婚姻習俗としては、仲人はトゥグス・フン「顔の目鼻立ちが整った人」が行い、両家に婚姻の連絡をする。トゥグス・フンは結婚して子供もいて、両親も健在な人である。私生児や寡男、目鼻立ちの整っていない人、及びラマ僧、尼は仲人にはなれない。仲人の年齢は三十歳以上で、歳をとった人が一番良い。

そして嫁を迎える側は仲人としてトゥグス・フンに、娘のいる家に行って婚姻を頼んでもらう。しかし仲人はすでに結婚が決まっている人を他の人には紹介しない。またすでに結婚している男性にもう一人女性を嫁として紹介することもしない。姪を甥の嫁にもしないし、気が合わない夫婦の間にとって、離婚させるようなこともしない。このようなことを仲人は非常に用心する。

蒙古では姪を甥が嫁に迎えることはない。しかし、母親の妹を甥が嫁

に迎えることはあり、父子二人で姉妹二人とそれぞれ結婚した例もある。漢人の慣習では弟が兄の嫁と結婚することは決して許されない。叔父の妻が若くして未亡人となっても、甥が嫁にすることは許されない。必ずほかの人と結婚させる。